

Lest darkness fall

山元 修

鳥取大学医学部感覚運動医学講座皮膚科学分野前教授

表題は、私の愛読書の中でも珠玉の一編であるL. Sprague de Camp著の歴史SF小説(1939年)の題名で、邦題は『闇よ落ちるなかれ』(早川書房)です。西ローマ帝国滅亡直後のローマにタイムスリップした主人公が、ビザンチン帝国のユスチニアヌス1世の股肱の部下・ベリサリウスのイタリア遠征により伝統的な古代ローマ社会が徹底的に破壊され、長い中世暗黒時代に入るのを防ぐため、知るかぎりの現代知識をイタリア半島に広めようと奮闘努力する物語です。この中で主人公が叫んだのが、「中世の闇よ、落ちるなかれ(Lest darkness fall)」でした。

I. 医学部卒業まで

私は福岡市生まれで、その後父の仕事の都合で鹿児島県の輝北町(当時)、福岡市、広島市、新潟市、福岡市と転々とし、大学では鳥取市と米子市、卒業後は北九州市(うち2年間は米国のボストン)、そして教授として米子市へ、退任してやっと北九州市に落ち着きました。思い出深いのは幼稚園から小学3年生までいた新潟で、真っ白な雪(図1)と、小学校の石炭式ダルマストーブの前でアルマイトのお弁当箱を温めて食べたこととお



図1 小学生時代の新潟での雪祭り



図2 マカロニオタクの中学生時代(当時はすべからく坊主頭でした)

米の美味しさで、福岡に転居後、給食がひどく不味く感じたのには閉口しました。

小学校高学年の時に油絵教室に通い、形、色彩、視覚的なバランスの美しさというものに非常に敏感になりました。いまでも映画狂の私の中学生時代は、とくにマカロニウェスタン(イタリア製西部劇)をテレビで観まくった末にオタクの域に達し(図2)、高校時代は部活動(弓道)に明け暮れました。

同世代は皆そうでしょうが、父から褒められた記憶がほとんどなく、旧帝國海軍軍人でしたので鉄拳制裁と称して殴られ、医学部合格時などは嬉しくて浮かっていたのを「鬼の首を取った気になるな」と酷く叱られ、結構イバラ道の少・青年時代でした。金銭的理由で浪人も国立大学以外も絶対不可というプレッシャーの中、当時文系脳の私が得意だった歴史を含め、文系科目が入試配点の半分を占める珍しい大学であった鳥取大学(以下、鳥取大)に現役で入学でき、なんとか卒

業した後、父から内科以外不可(基礎医学は論外)といわれつつも皮膚科を選んだ理由は、臨床も病理も形態学がその柱であり、その研究材料が豊富であったため、このことは小さいころに油絵を習ったことが大いに関係しています。

II. 2人のお師匠様の急逝

形態の美しさに魅せられ皮膚病理を志して入局したのは、当時皮膚病理学の西の神様(東の雄は当時北里大学の西山茂夫教授)であった故・西尾一方教授が主宰されていた、産業医科大学(以下、産業医大)皮膚科学教室でした(図3)。当時の常として手取り足取り教えてもらうことはありえず、カンファレンスでのご発言や、宴会で西尾先生が酔ってうっかり漏らしたお言葉や考え方を拾い上げて、西尾流皮膚病理を勉強する・盗むといったことで糊口をしのいでいました。教授診察の陪席で、ドイツ語での口述筆記や伝票書き、難解な筆跡(先生はかなりの悪筆家)の解読の過程で“西尾イズム”に溢れた臨床を体で覚えました。ところが、西尾流皮膚病理を会得できないまま、1987年4月に先生は現職のまま肺癌で逝去されました。亡くなる直前「第1病理学の堀江昭夫教授(やはり現職のまま急逝)のもとで勉強するように」というご遺言を残されました。堀江先生からは3年ほど一般病理学の基礎の手ほどきを受けました。特定の研究テーマは与えない主義の先生でしたので、同僚と共同でラットの血管鋳型を作成し、それぞれ皮膚、肝臓、膵臓を分け合って研究し、なんとか自力で博士論文(大学院には進学できなかったので論博です)にまとめました。ラットの肉球のエクリン汗腺は、従来考えられていた下方からではなく、上から下向性に血管支配されるということを電子顕微鏡(以下、電顕)的に証明しました。その後、優れたお師匠様につくことも叶わず、Leverの皮膚病理教書を読むなどして、独学で自分なりの皮膚病理体系を積み上げていきました。

III. 米国のお師匠様のもとへ

転機が訪れたのは1992年4月から2年間、米国ボストン大学皮膚科の皮膚病理部門のJag Bhawan教授(図4)のもとに留学したときのことです。もともと留学は卒後10年目までにやるべき目標と定めていましたが、当然のことながらコネがないので、米国皮膚病理学会の



図3 産業医大皮膚科入局時、故・西尾一方教授と新入局の5名(向かって右端が筆者)



図4 ボストン大学留学時代(向かって右: Jag先生, 左: Gilchrest先生)

主要メンバーによる『Pathology of the Skin』という教科書に連なっていた分担執筆者の中から適当に選んで(ボストンをはじめミネソタ、ノースキャロライナ、果てはニューメキシコまで)、論文別刷とともに留学希望の手紙を出しまくりました。Jag先生(親しみを込めてJag-senseiと呼んでいた)から「給料も出すから」という色よい返事をいただきました。Jag先生はインドご出身で、比較的アジア人の心もおわかりで、皮膚病理学者としての姿勢について教えていただいたのがいまでも大きな財産になっています。独身での異国生活は結構辛かったのですが、おかげで精神的には大いに鍛えられました。米国では5本の形態学や皮膚病理の論文を完成させましたが、とくにメラノサイトからケラチノサイトへのメラニン転送様式の3タイプについての論文(『Pigment Cell Research』)は大きな成果で、被引用回数が最多になりました。同時期、同施設のGilchrest教授のもとに東北大学から原正啓先生(現在は仙台市で開業)が留学されており、生涯の知己を

得ました。帰国後Jag先生から、上記『Pathology of the Skin』第2版の電顕病理学の項目の執筆を任されるという栄誉をいただき、また2016年に主催した第68回日本皮膚科学会西部支部学術大会にも特別講演演者としてご夫婦で来日いただき「I am proud of you, Osamu.」というお褒めの言葉を賜りました。留学中、Jag先生は広大なお庭の整備中に操作していたトラクターが横転し大怪我を負われ、一瞬、日本のお師匠様たちのことが頭をよぎり、帰国を余儀なくされるのかと思いましたが、幸い回復されホッとしました。

IV. 一寸先は闇、または私がいかにして開業するのをやめて人生どこでどう転ぶかわからないと思うようになったか

帰国後も孤立無援の中、産業医大で皮膚病理の研究を細々と続けましたが、まだ新規概念であった毛芽腫のケラチン発現性を基底細胞癌のそれと比較した研究論文(『British Journal of Dermatology』)を、当時ケラチン研究の第一人者であったドイツのMoll教授に褒められたのが嬉しい思い出です。その後、浜松から戸倉新樹教授が赴任された関係で、2003年に九州厚生年金病院に転出しました。翌年開業しようと準備していた矢先、募集すら知らなかった鳥取大皮膚科の教授選への立候補の打診が突然あり、逡巡しましたが開業も契約前ということもあり、締め切り直前に眠い眼をこすりながら徹夜で応募書類をまとめあげたのは、人生どこでどう転ぶかわからない、という強烈な思い出としていまでも残っています。逆に、昨今は責任だけ重くて旨味のない教授職ですので“一寸先は闇”と言い換えることができますが、これは後で述べます。

V. 教授生活総論

2004年9月、鳥取大に“落下傘降下”しました。最初の3年間は教室の立ち上げに精一杯で、単身赴任ということもありしばしば不眠に悩まされましたが、“一寸先の闇よ”落ちるなかれという思いと、留学時代に培った精神力でなんとか克服し、教室運営を軌道に乗せました。

教授になりたてで学会内で右も左もわからず不安

だったころ、当時徳島大学教授の荒瀬誠治先生や、秋田大学教授の眞鍋求先生に温かいお言葉をかけていただいたことは、いまでも忘れません。また、当時山梨大学教授の島田眞路先生と福岡大学教授の中山樹一郎先生とは、夫婦で親しく交流させていただき、たくさんの思い出をいただきました。同じ山陰の同志・戦友であった当時島根大学教授の森田栄伸先生(私とほぼ同じころに教授ご就任)とは、お酒の席でよく愚痴をこぼし合いました。福島県立医科大学の山本俊幸教授には学術面と遊びの面(相馬野馬追)でお引き立ていただきました。

海外では、韓国皮膚病理学会のKwang Hyun Cho先生(当時ソウル大学教授)ご夫妻やDong Youn Lee教授(Sungkyunkwan大学)ご夫妻とも親しくさせていただきました。高倉健さんの出身地である福岡県生まれの自分は、仁義という言葉は何より大切にしてきたつもりですが、本稿に登場する先生たち以外にも、多くの仁義溢れた方々に囲まれたのは幸せでした。

VI. 教授生活各論

教授職は若い人への教育が最大の使命と思っており、若手指導には情熱を傾けましたが、教室員も皆頑張ってくれました。その若手と一緒に行った主な研究をあげてみます。

- ・5年間にわたる経済産業省の新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)主導のナノ材料のリスク研究プロジェクトに参画し、二酸化チタンナノ粒子は少なくとも電顕レベルでは正常のラット皮膚では経皮吸収されないという知見を得て、日本の産業の将来に貢献できました。

- ・電顕的に抗真菌薬のルリコナゾールは、アゾール系一般でいわれている白癬菌細胞膜のみならず、それに先だって細胞壁をも障害するダブルの効果があるという新知見を得ました。

- ・皮膚筋炎の機械工の手の病理組織像として、偽checker board patternという特異所見があることを新規に見出し、徐々に紹介されはじめています。

- ・ロドデンドロール白斑が、尋常性白斑のような自己免疫機序でおこるのではないことを電顕的に明らかにしました。



図5 「皮膚病理道場あどばんすと」受講生との記念写真

・脂漏性湿疹には傍毛包クラスターというリンパ球と樹状細胞・組織球からなる構造があり、病理組織学的に酷似する乾癬と病態形成的に異なる点であることを見出しました。

・水疱性類天疱瘡病巣に浸潤する好塩基球は、紅斑期では炎症促進性に、続く水疱期では抑制性に働くことが示唆されるという、新規の病態形成仮説を形態学面から構築しました。

おわかりのように、人がやらない隙間分野の突拍子もない発想での仕事が多く、まさに王道の米国西部劇とはまったく異なった世界観が広がるマカロニウェスタンのテーマであり、その点で中学以来のマカロニオタク気質が活かされました。

このようなわけで還暦を迎えたころ、ようやく西尾お師匠様に追いついたと実感しました。

VII. 闇よ落ちるなかれ

2013年から2期6年にわたり日本皮膚病理組織学会理事長を務めました。理事長としての唯一最大の目標として、“皮膚病理に従事する若手の発掘・育成”をあげました。というのは世紀の変わり目前後より、昔は巷

に溢れていた皮膚病理に精通した先生が次々に引退され、徐々に皮膚病理のレベルが低下していることを実感し、また実際に皮膚病理に興味をもつ若者も激減していたからです。同好の士の安齋眞一先生(当時日本医科大学武蔵小杉病院教授)とは、皮膚病理は絶滅危惧種であると半ば自虐気味に話していました。本邦の皮膚病理に「闇が落ちる」前に「どげんかせんといかん」と思いささまざまな新規企画を立案し、安齋先生、鶴田大輔先生(大阪公立大学教授)、故・三砂範幸先生(当時佐賀大学准教授)を軍師に指名し、多くの助言をもらいました。

また当時の埼玉医科大学教授の土田哲也理事には非常にお世話になり、前々から私が学会の理事会で提案していた(ほとんど見向きもされませんでした)実習型皮膚病理講習会について、第112回日本皮膚科学会総会での企画案として、初心者向けの「実践！皮膚病理道場2013」(安齋先生命名)を川島眞会頭(当時東京女子医科大学教授)に紹介していただき、実現に至りました。バーチャルスライドを用い会場にチューターを配置した、セルフアセスメント＋質疑応答形式という新規の試みのため不安だらけでしたが、川島会頭をはじめ学

会スタッフのおかげで成功裏に終わり、いまに至る「教育実習セミナー皮膚病理」に先鞭をつけることができました。

日本皮膚病理組織学会でも、同様のセミナーである「皮膚病理道場あどばんすと」の年次開催をはじめ、ホームページの立ち上げ、優秀な英語論文への表彰制度新設、若手の集まりである草志衆結成、韓国皮膚病理学会の若手との国際交流、学術大会での初心者向けのセッション新設など、若手のための新規事業・改革を行いました。「皮膚病理道場あどばんすと」終了後の飲み会での若人との交流は、ささやかな楽しみでした(図5)。

退任前の最後の3年間の教授生活は、新型コロナウイルス感染症流行の影響で、まったく閉塞した状況でしたが、そんな中でWeb上での交流が盛んになった、という副産物がありました。それまで医局内で行っていたバーチャルスライドを用いた皮膚病理セミナーを拡大し、Web上で多くの他施設の若手に配信できるようにいたしました。これを月2回ほどの「紹運将門バーチャルスライド皮膚病理セミナー」と称して、最終的に全国25大学・施設の若手皮膚科・病理の医師に教育を施しました。討論の場も設け、若い人が皮膚病理で何に困っているかがわかり、大いに参考になりました。

以上のような地味ながらも“闇よ落ちるなかれ”という思いを込めた活動が実ったのか、徐々に皮膚病理を志す若手も増えてきて、絶滅危惧種から脱しつつあります。残念ながら私のライフワークである電顕については完全に闇が落ちたかのように、鳥取大での電顕観察もほとんど自分で行っていたので、頑張っ後継者を育てればよかったという悔いは残ります。

VIII. おわりに

18年半の教授生活を振り返ると、ナノプロジェクトでの理工系の先生との異業種交流、教室からの3名の教授の輩出、Webセミナーでの若手受講者との交流、学会や講演会での全国行脚といろいろな先生との楽しい会話以外、教室員が常に10名前後だったことを含め辛いことばかりだったというのが正直なところす。西尾先生の時代とは比べようもなく教授の地位は地に落ちており、立候補のお誘いを断ってあのまま開業して

稼ぐ道もあったかな、というのも実感としてあります。それでも退任まで、西尾・堀江お師匠様のように志半ばで^{たお}斃れることなくなんとか無事にやってこられたのも、たくさんの皮膚科・非皮膚科の諸先生、教室員、同門会の皆様、苦勞をかけた妻の支えがあったからこそ、と思っております。誌面を借りて、皆様に厚く御礼申し上げます。

「形態には必ずそうならなければならない(単純な)必然性がある」というのが私の口癖です。皮膚病理学の将来については不透明ですが、昨今のIT診断の興隆をみると部分的には闇が落ちるかも知れません。ただし、形態形成に関する研究についてはまだ十分な余地があります。私に続く若い人にはぜひ形態の必然性について研究してもらいたいと思い、“皮膚病理に闇よ落ちるなかれ”と祈念しています。最後に、私の場合は自身の皮膚病理体系を独学で築き上げましたが、しばしば独善に陥り時間もかかりますので、懇切丁寧に教えてくれる優れた皮膚病理学者に師事することをお勧めします。そして何より、私のように突然指導者を失わないよう、お師匠様のお体を常にいたわってあげてことを推奨度Aでお勧めして、締めくくります。最後に私の形態学の原点ともいえる小学生時代に描いた油絵を掲載します。



図6 小学生時代に描いた水仙の油絵